
過去の女

笹金明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の女

【Nコード】

N4098S

【作者名】

笹金明

【あらすじ】

かつて愛した女が幸せな私のところにやってきた。

一話

不安が頭をよぎった。

私は無敵の男である。だが、世の中には完璧な者は存在しない。私にも唯一つの弱点があった。そして、その弱点は誰にももらさずに来た。ただ一人の例外を除いて。

アリョーシャ・ラグウエル。私の唯一弱点を知るものであり、かつて私の愛した女だ。

恋は盲目とはよくいったものだ。あの頃の私はどうにかしていた。つまり、私は彼女に恋をした。まずアリョーシャとの出会いから語らねばならないだろう。

ちょうど今から10年になる。アリョーシャは、無敵の超人戦士と謳われた私と、古王国と新王国の戦場で出会った。まるで金粉をちりばめたような麗しい金髪の髪を持った女戦士が彼女だった。腰には帯剣して、今にも私の首を切りつけてきそうな鋭い眼差しを、私に向けた。だが、私はその殺気を感じて、彼女とは比べ物にならない年季の入り混じった修羅のごとき眼で見返した。後に彼女は、私を殺すつもりはなかったと語っていたが、今にしてみれば怪しい。もちろん彼女と私は敵同士であった。いくらなんでも自分の命を狙う女に恋をするなどということは戦士としては断じてないと名誉のためにいっておくことにする。つまり、私と彼女の場合はもう少し複雑ということだ。そして、この時、彼女は、傷んでいた。それが、なんともいえず哀れでならなかった。私は彼女が武器を持ってないのを目視すると、彼女の手当てをした。まだ15を少し超えたぐらいの年のようにも見えたし、もうちょっといつているようにも見えた。後から聞いたところによるとこの時16であつたらしい。アリョーシャは相変わらず私を睨んでいたが、手当てされると不思議な顔で私を見た。

「いいか。今回は見逃してやる。だが、私が新王国側にいる限りお

前たちに勝ち目はない。諦めて普通の暮らしをするのだ」

私が戦場において求めていたのは弱いものいじめや殺戮ではなく、好敵手だった。だが、私の力に匹敵するような者は現れるはずもなく、戦争には飽き飽きしていた。だが、戦争が終われば私のような者は必要とされなくなり、追われる身となることは明白だった。

彼女はその後幾十度となく私の前に現れ、稽古を挑むかのようにうちあつた。彼女と戦場で会ったたびに私は彼女の類まれなる剣技の才能に驚かされた。みるみる上達していったアリョーシヤは2年後、私をうちまかした。彼女の剣技はそれほどに上達していた。私は不死身の肉体のために彼女に殺されることは微塵もあるとは思わなかったが、彼女がどう出るか窺っていた。

「不死身の戦士ドネルドよ。今、私は汝に勝った。命乞いをするか？」

「せぬ」

と私は短く言った。

「何故初めて会ったとき私を助けた？」

「知らぬ」

私はまた短く言った。

「ドネルドともあろうものが、戦場で敵に情けをかけた報いがこれだ。私はあの時の屈辱感を忘れない。覚悟せよ」

そして、彼女は私の胸を剣で一突きした。しかし、私は倒れなかった。驚愕が彼女の顔に広がる。剣術練習用の木人形のように、私は突っ立っていた。彼女がいくら切りつけても私の傷はすぐに治ってしまうのだった。私は再度、彼女に言った。

「お前はまだ若い。これ以上戦争に関わるな。私はいい好敵手を見つけたことを喜んでいいる。私と旅をせぬか？新王国の勝勢はもはや動かしがたい。東の未知の大地で剣術の修行を共にせぬか？」

彼女は切りつけるのをやめて、考えこんだ。

「来るならば、明日の夕刻サルデアルド海岸に來い」

もうアリョーシヤの殺気は消えていた。

あくる日、新王国と古王国の一大決戦が始まるうというときに、私は首尾よく、抜け出し海岸にたどり着いた。元部下である青年がそこで船を用意して待っていた。私は彼女を待った。だが、なかなか現れない。もともと無茶な願いだったなと私は思い。一人船を漕ぎ出そうかとオールを動かした時、ふいに、人影が現れた。紛れもなく、アリオーシャであった。私は歓喜の念を起すとともに「よく来たな。戦況はどうだ？」

と訊ねた。アリオーシャは金色の結ばれた髪を解いた。ほどかれた髪は光にあたって反射して美しく輝いた。

「古王国の負け戦だ。この大陸での戦いも終わりだ。私はさらなる戦いを求めて東の大地に行くことにした」

「よかるう。理由はどうあれ。決心がついたなら結構だ」

私たち二人はこうして出航した。

彼女は戦以外の何をもほとんど知らなかった。私は生きてきて見聞してきたことを、少しずつ話してやった。彼女は私の知識に感心したようだった。

「あなたは私の剣術の師だった。そして、今は人生の師だな」

と笑いながら彼女は冗談のような真実ともつかぬことを言った。

そのときアリオーシャの大海の風になびく髪を見て私は初めて美しいと感じた。だが、それも一瞬だった。私たち二人は航海中はたわいもない話をするばかりで、一向に関係の進展はなかった。しかし、彼女は私に尊敬の念を抱いているらしかった。

そして、船の上では24時間一緒にいることになる。

彼女の苦しみも、私は見てしまった。多くの手にかけて人の夢を見る、と彼女は言った。戦に明け暮れて眠っていた記憶が、殺し合いのない世界で解かれたらしかった。そして、また苦しみが増す度にアリオーシャは血に飢えていった。何度私を殺そうと彼女はしただろう。だが、私は殺されなかった。あくる日になると、何事もなかったように、生きていた。

血は一層彼女の悪夢を高めるだけだった。やがて、彼女は私に助けを求めてきた。何故か彼女と最初に出会った頃のことを思い出した。今度は身体ではなく、精神を病んでいたのが違うところではあるが。私は彼女の話聞いた。若い頃から女の身で戦場に出ていたアリヨーシヤは、その生い立ちから語りだした。

「私の父は有名な商人であった。だが、ある日、突然、王室騎士に捕まり、私は父の命をかけて戦場に出なければならなかった。普通ならば初陣で死んでいただろう。だが、あなたが私を助けたのだ。私はあなたを憎むことで生きてきた。どんなにつらいことがあっても耐えられた。いつか、あなたを自分の物にするために。でも、あなたはどうしても、私のものにならなかった。そして、父も数ヶ月前に病死した。あなたがいなくなったら私は何を目標に生きていけばいいのだと。だから、ここに来た」

私はこの時、彼女は彼女なりの愛し方で私を愛しているのに気付いた。もっとも、それは正常とはいえなかったが、彼女に殺されるためなら、いくらでも殺されることを許していた私も正常ではなかったのだろう。いつの間にか、人のぬくもりを知らない彼女を哀し愛した。そして、私にできることなら人のぬくもりを教えてやろうと思った。それが、命をとらなかつたものの責任だと思ったからだ。私はアリヨーシヤをかいがいしく看病した。うなされる時は手を握り、労わった。さらに、アリヨーシヤは心のつながりを求めてきた。私は彼女が少しでも楽になるならばと私の生い立ちや、考えなどを聞かせた。そして、そこには私の不死身の秘密も含まれていた。その時、私は彼女になら殺されてもいいと思っていたのは確かだった。私たちは、やがて東の大陸につくと、様々な冒険をした。だが、彼女は病が癒え、やがて、私を必要としなくなった。私も彼女を安心して見送った。6年前のことだった。

だが、事情は変わり、私は東の大陸の外れ町で、今どうしても死ぬことはできない事情にあった。

ことの発端はちよつとした戦に力を貸したことだが、残念ながらその戦は負け戦だったらしい。私は追われる身となった。そして、逃げて逃げるうちに町外れに、新たに愛する女ができた。ミーシャという、亜麻色の髪をした乙女だった。朗らかで、戦いとは縁のない屈託のない笑顔で私を癒してくれた。家庭的という言葉がぴつたりくるだろうか。未亡人ではあつたが、望まない結婚であつたらしく、実家である酒場に帰ってきていたところを私とであつた。私たちは恋に落ちた。そして、所帯を持ち、今では一歳の子供もいた。私は人としての無上の喜びを味わっていた。

そんな時過去の唯一、弱点を教えたアリョーシャのことが自然と頭に浮かび、不安になるのは道理であつた。そして、その不安は的中することになる。彼女からの手紙が私宛にきたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4098s/>

過去の女

2011年4月11日21時40分発行